2022
TWCPE

# OPEN CAMPUS

2022年度のオープンキャンパス（大学公開）は、下記日程での開催を予定しています。
お気軽にご参加ください。

## オープンキャンパス 予約不要

10:00～15:00

2022 5/29 日
6/19 日
7/17 日
8/ 3 水
8/28 日
9/11 日
2023 3/12 日

- 大学・短大概要説明、入試概要
- キャンパスツアー
- クラブ学生のパフォーマンス
- 大学・短大紹介DVD上映
- スマイルカフェ（学生との交流）
- 入試相談、個別相談、クラブ見学
- クラブ体験等

## 短期大学ミニオープンキャンパス 事前予約制

10:30～12:00

2022 5/14 土
10/ 8 土
10/22 土
11/26 土
12/10 土
2023 2/25 土

- 短大概要説明　●入試概要
- キャンパスツアー
- スマイルカフェ（学生との交流）
- 入試相談　●個別相談
- 短大紹介DVD上映等

ラブスポ! 2022年4月1日発行

表　紙／木部真由莉さん（体育学部体育学科3年）撮影当時
　　鵜鷹くるみさん（体育学部体育学科1年）撮影当時
裏表紙／創立120周年を記念して建てられた藤村スポーツセンター
　　（2021年8月竣工／写真左）

発行元／学校法人 藤村学園
東京女子体育大学
東京女子体育短期大学
〒186-8668　東京都国立市富士見台4丁目30番1号
TEL.042-572-4131（代）　https://www.twcpe.ac.jp/

# ラブスポ!

TAKE FREE
VOL.14

スポーツを愛し、スポーツとともに生きる。

## オリンピアンに聞く。

120年の歩みをふりかえる

夢を目指してSTEPUP!

体育から見つけた私たちの未来

TOKYO 2020 INTERVIEW

発行：東京女子体育大学・東京女子体育短期大学

Love sports and live with them.

# TOKYO 2020 INTERVIEW

2021年、コロナ禍という厳しい状況の中で東京2020オリンピックが開催されました。
世界の多くの人々に希望と感動を与えたオリンピックで、東京女子体育大学の卒業生も活躍。
今回は東京オリンピックで活躍した卒業生たちに、試合でのこと、感じた想いなどをインタビューしました。

写真提供：フォート・キシモト

## スポーツを愛し、スポーツとともに生きる。

OLYMPIAN FILE 01

## 森さやかさん

ソフトボール

### 競技を楽しみ「一打に賭ける」その積み重ねの金メダル

ソフトボールの魅力は、打つ・走る・投げるなど、競技の中で様々な動きができるところ。小学4年生で始めてすぐにハマりました。卒業文集には漠然と「オリンピック選手になりたい」と書きましたが、中学生の時に膝の靭帯を切ったこともあって、オリンピックを目指したというよりは、高校・大学・実業団と「ソフトボールが楽しくて続けていたらオリンピック選手になれた」という感覚です。

2008年の北京で日本が優勝した時は大学に在学中。金メダルを見せてもらい、オリンピックを身近に感じられる環境でした。オリンピック種目から外れても特に気にならず、卒業後は実業団へ。1年目は全く打てずに悔しかったですね。監督から細かい指導を受けて打撃に関する引き出しが増え、試合の打席で使えるようになった3年目に首位打者を獲得。次の年に全日本に選出されて視野が広がり、刺激を受けたことが技術向上のターニングポイントになったと思います。

東京オリンピックは先発ではなく代打として出場。監督から「一打に賭けろ」と言われ、重要な場面で出される覚悟を決めました。監督に信頼して送り出してもらうため、毎日相手チームのビデオを見てタイミングを研究。しっかり準備をしたので初球から振っていけました。個人的には初戦のセンター前ヒットが印象に残っています。チームとしての目標はもちろん金メダル。重圧はありましたが、戦略通りにやれば勝てる。精神的にも肉体的にも辛い練習を乗り越え「やることはやってきた」と開き直って戦えました。決勝はピンチの場面で何度もミラクルが起き、ベンチで鳥肌が立ちました。優勝が決まった瞬間は「嬉しかった」の一言です。周囲の期待に応えられたし、代表に選ばれず悔し涙を流した選手たちのためにも、金メダルが取れて良かったと思います。

選手は今シーズンで引退します。所属先で選手を支えること、オリンピックの盛り上がりを維持して競技人口が増えるよう、ソフトボールの楽しさや魅力を伝えていくことが次の目標です。

### PROFILE

1988年、埼玉県生まれ。在学中の2010年にインカレ優勝。卒業後はルネサスエレクトロニクス高崎（2011〜14年）→ビックカメラ高崎（2015年〜）に所属。2014年世界選手権代表。日本リーグ首位打者1回、ベストナイン3回。打撃力が高く、外国人投手に対する強さから「打撃の職人」と呼ばれ日本代表で活躍。

# 目指すべきチーム力に気づいた今、パリ五輪にも挑戦したい

OLYMPIAN FILE 02

## 有馬 優美 さん

水球

もともと競泳とドッヂボールが好きだったことと、父の影響もあり、小学生の時に水球を始めました。中学2年生の時に東京オリンピック開催が決定。脂が一番乗った大学生で代表入りしたいと思っていました。大学3年生でユニバーシアード※に出場し、日の丸で初メダルを獲得。チームの団結力は世界で一番高く、個人としても得点王になり、世界に通じるという自信になりましたね。

高校卒業後は全国トップクラスの水球部で水球を学びながらオリンピック出場を目指せるという理由で、東女体大に入学しました。

入学後は「センターバックをやりなさい。そしたら絶対代表に入れる」という監督の助言で、それまでとは一転しての守りのポジションに変更して代表入り。最初は戸惑いましたが、自分の強みが活かせる大事なポジションだとわかりました。オリンピックの試合本番は馴染みのあるプールだったのですが、五輪マークを見てテンションが上がりました。初めて国歌を歌い、自分もこの場所に立てたと思うと感慨深かったです。

試合後に「元気をもらえました」と沢山の人からメッセージをもらい、スポーツは人に力を与える、私がやっていることには、価値があるんだと思いましたね。それでも東京オリンピックのプレー面では悔いしかなく、オリンピック中はストレスが高いこともあり、試合後は気持ちがプツンと切れてしまいました。そんな中、銀メダル獲得の女子バスケットボールの大活躍をテレビで見て、本当に鳥肌が立ちました。自分が目指したかったチームはこれだ、ここで諦めずにまた次のパリ五輪まで頑張ろう、と感化されましたね。

日本女子は体格のハンデを補わないと勝てません。シュート決定率の強化と、泳ぐ水球を今後も続けていきたいです。

水球はまだ男子の方がメインで「女子もあるんだね」と言われるのが悔しいんです。次のパリオリンピックにも出られれば、女子水球の普及活動にも絶対つながると思っています。

※ 現：FISUワールドシティゲームズ

### PROFILE

1997年、鹿児島県生まれ。卒業後は東女体大のOGチームでつくられた藤村に所属し、体格を活かして守りのポジションとしてチームに貢献している。また、力強いシュートも持ち味の選手。2017年の世界選手権で得点ランク7位を記録。2019年の世界選手権ではチーム最多の18得点をあげ、得点ランク3位に輝くなど得点源として活躍を見せた。

OLYMPIAN FILE 03

## 藤井 紫緒 さん

ハンドボール

小学校の頃にクラブチームでハンドボールを始め、大学は国内トップクラスの東女体大を選択。在学中は毎日走って、走って、ひたすらトレーニングをしていました。卒業後は企業のチームに所属した後、教員を経て競技に復帰。現在は「大阪ラヴィッツ」に所属しています。これまで北京やリオデジャネイロのオリンピック代表に選出されながらも、出場は叶いませんでした。

東京オリンピック代表には、2020年の段階で候補として名前が挙がりました。ところがコロナ禍の影響でオリンピックが延期になって、代表選考合宿にも参加できない状況に。今回は出場こそ決まっていたものの選考争いが厳しく、ずっと不安や怖さがありました。代表に決まったときは、長年の夢にやっとたどり着いた喜び以上に、新たな自分の課題も感じ「ああ、これからだな」という思いがありました。

事前合宿では自分が年長だったこともあり、積極的にコミュニケーションを取ってお互いのプレースタイルを理解し合えるよう心がけました。競技面では今持っている力をより磨くことに注力。短期間でしたが、できる限りの努力ができたと自負しています。

オリンピックではメダルを第一目標にしながら、まずは予選通過を目指し、一戦一戦の勝ちにこだわって試合にのぞみました。特に印象に残っているのが、格上のモンテネグロに勝利した試合です。目標達成という面では悔しい結果でしたが、多くの課題に気づかされる機会になりました。

実際にやってみて、失敗して、そこから新たにつかむものがあると教えられたのは、大学での経験からです。3年の時にエースという自覚を持ったことで意識や行動が大きく変化。自分のプレースタイルを身につけて飛躍的に成長することができました。この学びがあったからこそ、オリンピックという夢が実現できたと大学にはとても感謝しています。将来は指導者という立場で、再び夢の舞台に挑みたいと思っています。

### PROFILE

1985年、大阪府出身。大学を卒業後はオムロン（2007〜2015年）に所属。一度は現役を引退し教師の道を選んだものの、東京オリンピック出場を目指し復帰。現在は大阪ラヴィッツ（2017年〜）に所属している。2020〜2021年の日本リーグでは、2年連続で得点王を獲得。ロングシュートを得意とし、東京オリンピックでもライトバックのポジションで活躍を見せた。

# 大学での学びを糧に夢を実現 再び新たな目標に挑む

## 「必ずできる」という信念で最大限の力を出し切る

OLYMPIAN FILE 04

# 今井 美穂さん

マウンテンバイク

東京オリンピックへの挑戦を決断したのは、2019年の年明けでした。このチャンスに行動しなければ、きっと後悔すると思ったからです。選考基準は2019年5月から1年間の競技成績と、世界ランキングで国内トップに入ること。クリアするには、国内外の数多くのレースに参戦する必要がありました。私は小学校の教員なので、授業をしながら帰宅後は3時間のトレーニングを日課にし、先生方のご協力で海外に遠征。仕事と競技の両立は大変でしたが、時間に制限があるからこそ集中力が高まり、楽しく充実した日々でした。

代表に内定したのは、コロナ禍のため世界中のレースがストップし、さまざまな不安を抱えていた渦中でした。今までやってきたことが実を結び、やっと夢が叶ったことの嬉しさと同時に、ほっとしたというのが率直な感想です。そこから開催までの1年間は、オリンピックのコースを走る自分、ゴールした時の自分を思い浮かべながらトレーニング。「イメージしたことは必ずできる」という強い思いを支えに、試合当日に向けて一つひとつの課題をクリアしていきました。

オリンピック本番では、完走することを自分自身の目標に設定。当日はコースコンディションが悪く、難しいレースとなりました。目標達成はできませんでしたが、今は何も後悔がなく、最大限の力を出し切った、やり切ったという気持ちです。自国開催だったので、日本のみなさんが応援してくれる環境で走ることもできて、本当に幸せな時間でした。

学校に戻ると子どもたちが歓声を上げて出迎えてくれました。私自身の実体験も話しながら、みんなにはたくさんの可能性があるから、夢を見つけてチャレンジしていいんだよと伝えています。今回のオリンピックを通して、子どもたちにがんばれば夢が叶う姿をリアルに見せることができました。好奇心や向上心を刺激するきっかけにもなり、挑戦してよかったと思っています。

### PROFILE

1987年、群馬県生まれ。在学中は陸上の七種競技でインカレに出場。2017年にシクロクロスの全日本選手権で優勝。2018 ～2020年のマウンテンバイクの全日本選手権では3連覇を達成し、東京オリンピック代表として出場した。日本トップレベルの選手として活躍する傍ら、小学校教員としての一面もあわせ持つ。

## フランス人コーチの専属通訳として海外をまわり出場権を獲得

OLYMPIAN FILE 05

# 郷倉 マリーンさん

スポーツ通訳

東京オリンピックを迎えるにあたって、トランポリン・体操では、日仏交流合宿や日本での事前合宿のアテンド通訳を担当。フェンシングでは、女子フルーレ・フランス人コーチの専属通訳（競技通訳）をしていた関係で、チームと海外遠征をまわり世界ランキングポイントを稼ぎ、出場権を獲得しました。東京オリンピックでは、コロナによるADカードの発行状況から人数が制限され、フェンシングの個人・団体試合当日は会場で通訳をすることができませんでした。4年間国内練習や合宿、海外遠征に帯同し、一緒にオリンピックの準備をしたフェンシング・女子フルーレの通訳を本番にできなかった悔しさは忘れません。このことからも、スポーツ通訳の認知・重要性をもっと広めていきたい気持ちが生まれました。

3年後には私の第一の故郷であるパリでオリンピックが開催されます。様々なスポーツ競技がフランスの地で安全・安心に事前合宿が行えるようにコーディネーター・アテンド通訳をし、準備期間や本番の日には現地でフェンシングの競技通訳をしたいと思います。

### PROFILE

1993年生まれ。日本人の父とフランス人の母を持ち、高校卒業まではフランス人学校に通う。小学3年生から日本語の授業を受け、本格的に日本語を習い始める。帰国子女枠で東京女子体育大学に入学し、卒業後はスポーツ通訳として活躍している。

## 女子水球として初の五輪を体感 日本水球界の発展に貢献したい

OLYMPIAN FILE 06

# 川﨑 奈美枝さん

水球コーチ

オリンピックの1年延期によってチームが再編されたことで、私もスタッフに入ることができました。コロナ禍ということもあり、延期されていたワールドリーグがオリンピックの2ヶ月前に開催。代表チームが海外の選手と対戦できる唯一の場だったので、課題の確認や自信にもつながり、オリンピックに向けて良い準備が出来たと思います。

女子水球としては初のオリンピックであり、私自身にとっても初めてのオリンピックを体感してみて、やはりオリンピックってすごいと感じることばかりでした。日本人は諸外国人に比べて体が小さいので、勝つことの難しさはもちろんですが、1点を貪欲に狙い自国の勝利に向けて貢献する姿勢、代表選手の自覚やプライドを感じることができました。今回のオリンピックでは、東京女子体育大学から選手1名、コーチ1名の選出でしたが、この素晴らしい舞台に多くの選手を輩出できるように、母校の選手の強化に努めることで、日本の水球界の発展に貢献できたらと思います。

### PROFILE

1978年生まれ。藤村女子中学高等学校卒業後、本学へ入学。在学中は日本代表のスタメンとして活躍。卒業後はもう一つの夢であった水族館へ就職。退職後は母校の高校・大学で水球を指導。日本代表のコーチを務めている。

120th Anniversary Plan OG interview

東京女子体育大学

# 120年の歩みをふりかえる

**東京女子体育大学は、1902年に日本初の女子体育教師養成学校として創設。2022年で創立120周年を迎える記念すべき今回は、体育・スポーツや教育に貢献されてきた卒業生に登場いただきました。**

## 「凛と立つ」女性の生き方

本学の実質的な創設者といわれる藤村トヨは、1904（明治37）年に本学に奉職。1908（明治41）年に校長に就任しました。女子体育のパイオニアとして、トヨが築き上げたその精神や姿勢は、今も東京女子体育大学に根付いています。私たちは変わることなく「凛と立つ」女性を社会に輩出し続けてきました。卒業生のインタビューを通して、体育・スポーツが生き方の土台として果たす役割の大きさが伝わることでしょう。

### 藤村 トヨ

**明治、大正、昭和時代を代表する体育指導者で、日本の女子体育のパイオニア。明治41年に東京女子体操音楽学校（現東京女子体育大学）の校長となり、同校の基礎を築く。**

建学の精神

**「心身ともに健全で、質素で誠実、礼儀正しい女子体育指導者の育成」**

本学の精神的構え

**「腰伸ばせ 即 腹の力」**

❶創立当時の校舎　❷藤村トヨ（左）のなぎなた演技（明治35年）。1年生必須科目「藤村トヨの教育」でも実技の授業がある　❸屋内体操場での授業風景　❹音楽体操を行っている風景　❺井の頭公園での体操



120th Anniversary Plan OG interview 01

# “出会い人、出会い事”で心弾ませて過ごした大学生活

**Profile　藤島 八重子**

1965年、東京女子体育大学体育学部卒業。新体操部に所属し、大学4年時にはインカレ、全日本選手権優勝。1969年第4階新体操世界選手権大会（ブルガリア・バルナ）に日本が初出場し、コーチを務める。東京都・清瀬市・日本体操協会・（公社）日本新体操連盟より功労章を受章、清瀬市市制50周年特別顕彰で表彰される。現在、同学評議員・同窓会藤栄会会長を務め、これまで2冊の書籍を発行している。

## 大学での経験と出会いが人としての豊かさを築く

大学時代新体操部に所属し、数々の大会で活躍、大学卒業後助手・講師として指導者を務めた藤島先生。「手さぐりで未知の可能性を追求し、どこまで美しく演じられるかと“新体操の魅力”をつかむには心からの会話が大切と実感。部活動等で自然に身に付けられ、助手時代には生きいきと取り組む学生、偉大な恩師伊澤ヱイ先生（※）からの深く熱い刺激は今も心が震える程で“出会い人、出会い事”が人生を広げてくれるものだと思います」。1964東京オリンピック閉会式では松明の演技（同学学生出演）指導をし、この経験も含め、指導者として「新体操」で世界へ挑戦する道が開かれていったと話す。

※藤村トヨの実妹。初代学長トヨを継いで2代目学長を務めた。

## 「新体操」の誕生、個性を伸ばす指導でオリンピアンを輩出

1967年デンマークでの世界選手権の視察により、日本の「団体徒手体操」は世界に通用すると実感、次の世界選手権へ日本を初出場させるため尽力され、新しい動きの発想であることから「新体操」と改名し、より指導に熱が入ったという藤島先生。1969年ブルガリアでの世界選手権ではコーチとして指導、初参加で5位入賞を果たす。「まず私自身が目を輝かせ、子どもたちを愛し語りかけ”ほめ言葉”を重ね、息をすってはいてと”動きの呼吸を自然に行う”ことを一番大切にし、個々に深さを広げ、自由な心でステップアップと手を差しのべて個性を磨き伸ばしています」と話す藤島先生。

## 大学と新体操から学んだ“スポーツが人を作る”ということ

「新体操を通して“人づくり”を教わりました。教育の分野で知識を広げて、体育教育は狭い領域にとどまることなく、広くスポーツの持つ役割として、健康・体力・健全な精神づくりを根底に置いて、目的を持った指導をすることが必要です。好奇心を持ち、豊かな心情を育み、一歩一歩前に進んでいく、これは『一生ものの、姿勢をつくる。』という本学のコンセプトにもつながりますね」。また、東京都清瀬市において、幼稚園での体操指導を50年、婦人の美容体操・母と子の体操指導は40年担当するなど、多くの方々の心身の健康に寄与してきた実績もあり、同学の評議員・同窓会会長を務めるなど、東京女子体育大学の発展を支えている。自分に自信と誇りを持って指導をしているという藤島先生は、常に挑戦してきた大学時代と変わらず、ふじしま新体操クラブを主宰し、子どもの心に寄り添いながら、生きる力を養って、強く広い心を育めるよう指導を続けている。「昨今の激動は苦しい中ではありますが、自分に誇りを持つことで、その思いがきっと“出会い人、出会い事”に巡り合わせてくれるはずです」。

120th Anniversary Plan OG interview 02

# なぎなたと大学生活が私の歩む道を教えてくれた

Profile **中村 ゆり子**

1970年、東京女子体育大学体育学部卒業。1981年、(公財)日本スポーツ協会 なぎなたコーチ4マスター。1989年、(公財)全日本なぎなた連盟 なぎなた範士審議員・なぎなた名誉審判員。2018年、日本武道協議会 武道功労章を受章。2021年、(公財)全日本なぎなた連盟 副会長。本学では「藤村トヨの教育」の授業の中で「なぎなたの技法」の指導を担当。

## 入学当時に感銘を受けた先輩方の優しく、堂々とした姿

東京女子体育大学 体育学部出身で、公益財団法人 全日本なぎなた連盟の副会長を務める中村ゆり子先生。「入学した年に台風で多摩川が氾濫して、先輩に避難するぞ！と声をかけられ、座布団を頭にのせて避難した経験があります。その時、歳の変わらない先輩たちの毅然とした対応を見て“この学校の先輩はすごいな”と感じたことを今でも覚えています。周りの人と助け合い、そして自ら行動して、道を切り開いていく大切さを大学生活で学びました」。中村先生の経験は、現在の本学コンセプトである『一生ものの、姿勢をつくる。』に相通ずるものがある。

## “自ら開拓すること”“武道の理合い”の大切さを学ぶ

「大学ではスピードスケート部に所属しながら、12歳から続けていたなぎなたを部活動として創部しました。当時は練習場所もありませんでしたが、たくさんの方の支えもあり、インカレや多くの大会にも参加しました」。そう話す中村先生は、中でも大学4年の時に参加した大会が強く印象に残っているとか。「長期合宿後に挑んだ大会だったんですが勝つことができなくて。人一倍練習しているのになぜと思った時、足腰の強さや技術だけでなく、集中した気力や守りと攻めの時をみて動く“虚と実”が大切なんだと気付きました。なぎなたによって武道の理合いが分かるようになり、精神的にも強くなったと思います」。

## 選手を育成する指導者として次の世代に期待すること

現在は“なぎなたをもっと多くの人に知ってほしい”という想いで、競技の指導にあたる中村先生。選手を育成する上で、大学時代の経験が土台になっているという。「大学では、夢を持って集まった人から経験してきた種目のことや、教わってきた先生方の姿勢などの話を聞けて、すごく良い経験ができたと思います。自分で工夫して、創生していくことができるのが大学です。ぜひ皆さんにも、いろんなことにチャレンジして、社会で生きていくための基本を大学で養ってほしいですね」と中村先生はこれからの後輩学生に期待を募らせる。

120th Anniversary Plan OG interview 03

# 大学での出会いと学びで進むべき道が明確になっていく

Profile **大房 知世**(左)

2008年東京女子体育大学体育学部卒業。現在、都立八王子拓真高等学校で保健体育科教員として従事。

Profile **木下 綾香**(右)

2020年東京女子体育大学体育学部卒業。現在、国立市立第一小学校で教員として従事。

## 教員を目指し学んだ道のり

**大房：**幼い頃から漠然と先生という職業に憧れていました。小学校の頃の担任だった先生がとにかく面白くて、授業も分かりやすく、楽しかった。その時から、私も先生のように学ぶことの楽しさや、分かることの喜びを伝えられる先生になりたいと思うようになりました。高校の体育の先生が東女体大出身だったこともあり、好きだった体育と小学校の免許が取れるよと薦めてもらったことが東京女子体育大学を志望したきっかけです。

**木下：**私は小学校の時から体を動かすことが好きでした。高校生の時、同じクラスだった友だちが体育教員を目指して体育大学に進学するという話を聞いて、「私も体育の先生になりたい」と思い、東京女子体育大学に入学しました。入学当初は体育の先生を目指していたのですが、実際に授業を受けたり、ボランティアに参加したりしているうちに、小学生に教える楽しさを知って、自分には小学校が合ってるかも！と思い、免許を取得して小学校の先生になりました。

**大房：**私はその逆で、大学3年まで小学校の先生になろうと思っていましたが、教育実習で体育の授業を教えるのがとても楽しくて、体を動かすこと、教えることの楽しさを改めて実感したことで体育の先生を目指すことに。在学中、実技の授業で作成したノートは体育教員になった今でも参考にしています。

**木下：**私たちのように適正や想いによって進む道を選択できたのもこの大学で学んだ利点だと思います。

## 教育の現場で感じた“教員としてのやりがい”

**木下：**小学校では毎日子ども達と一緒にいるので大変なこともありますが、気がつくと一人ひとりがすごく成長していて、人の成長を肌で感じられることがやりがいですね。

**大房：**教育の現場に立つと、学習面で課題がある生徒や、精神面で不安を抱えている生徒など抱えているものが違うので、生徒に合わせた指導の難しさを実感します。周りの先生と相談し、連携して、教員みんなで教育をしていくことの大切さを教員になって学びました。

**木下：**そうですね。子ども達によって考えも思っていることも違うからこそ、話し合って思っていることを引き出すように心がけています。子どもたちが自分の考えを持ち、理解して行動できる大人になれるように指導していきたいです。

**大房：**スポーツを通して、協調性や互いを思いやる気持ちを学んでもらえるのも体育の魅力だと感じます。生徒の「できない」を発見し、「できた！」「楽しい！」につながる指導をこれからも続けたいです。スポーツを極めたい、教員になりたいなどいろんな目標を持っている皆さんにも、元気で明るい東京女子体育大学で夢に向かって頑張ってほしいですね。

# 夢を目指して STEP UP!

教職を目指す生徒がより実践的な教育を受けられるのも
東京女子体育大学の特徴のひとつ。
学生の夢を叶えるサポート体制も充実しています。

## CASE 01 部活動と両立して教職を目指す

体育教員であり、剣道を教えていた父親の姿に憧れて、「私も体を動かすことの楽しさを教えられる体育の先生になりたい」と思うようになりました。保健体育の教員免許が取得でき、より専門性の高い指導を受けられることが本学を選んだ理由です。剣道部に所属し、選手兼主任として活動しながら、教員採用試験の勉強を両立することは大変でしたが、4年間の経験が今後教員として働く時に必ず活きてくると信じています。

**菊地 咲希**（秋田県立能代高等学校出身）

### CLOSE UP

教職ラーニングステーションには、2年生の後半から通い始めました。教員を目指して取り組む人たちが集まっているので、その環境の中で勉強することで「私も頑張らないと！」と刺激をもらっていました。先輩後輩関係なく、教職の情報を交換できることも、この施設のメリットだと思います。苦手な科目は個別で教わったり、論文も添削してもらえて、親身になって指導いただきました。

**見方 優衣**（千葉県柏市立柏高等学校出身）

## CASE 02 周りの人の支えが夢の実現につながる

小さい頃から人に教えることが好きだったのが、教員を目指すきっかけです。高校時代の先生の薦めもあり、中学高校の保健体育の教員免許が取得できる本学を志望しました。自分が興味のあるスポーツを深く学びながら、その学びが教員という目標につながり、そして同じ目標を持つ仲間と共に積極的に頑張ることができて、本学に入って良かったなと感じています。「結果だけでなく、過程を大切にできる教員」になれるように尽力していきます。

### CLOSE UP

教職を目指す友達に教えてもらって教職ラーニングステーションを知りました。参考書や資料がたくさん揃っていて、分からないことはその場で質問できるのが良かったです。各都道府県に合わせた対策や、願書の書き方なども詳しく教えてもらえました。授業の間の空き時間に勉強しに行くだけでなく、友達と一緒に課題をしたり、お昼を食べたり、私にとって落ち着く場所です。

## CASE 03 手厚い教職支援を最大限に活用

教員を目指すきっかけになったのは、高校時代に所属していたソフトテニス部の顧問の先生です。生徒からの信頼が厚い先生のようになりたいと思い、体育教員育成に力を入れている本学を選びました。特に、より実践的な実技科目が受けられるので、教員になってから役立つと思います。教職ラーニングステーションをはじめとする教職支援が充実しているのは大きな魅力ですね。また、元オリンピック選手の先生から教わる貴重な経験ができました。

**中村 琴衣**（宮城県古川黎明高等学校出身）

### CLOSE UP

教職ラーニングステーションへ行き始めたのは、教員採用試験の4か月前からです。教職関係の雑誌や問題集が揃っているので、活用していました。問題集を解けば解くほど、点数が上がっていく嬉しさを感じていましたね。専門の先生が常駐しているので、試験前には面接練習も指導してもらえて不安なことも気軽に聞ける環境で、精神面でも支えられました。

## 教職を目指せる環境がある

教職や大学院を目指すための充実したサポート体制をご紹介。夢に向かって頑張る学生・卒業生を全力で応援しています。

### 3 SUPPORT

#### 教職ラーニングステーション

学生の教員採用試験等に向けた学習スペースとして設置された「教職ラーニングステーション」。教員を目指す学生の相談や自学自習のサポート、必要な資料の提供を行っています。

利用可能時間：平日9時～20時（休業中は19時）

#### 教職経験者が常駐してサポート

専任の教職アドバイザーと支援員が常駐し、学生のニーズに応じた指導（それぞれの能力に合わせた個別指導・1限目前講座）を実施し、部活動等との両立をサポート。教職アドバイザーが作成した採用試験問題も活用できます。

#### 大学院への進学

本学では、上越教育大学と連携協定を結ぶなど、教育やスポーツ分野の大学院に進学する学生を支援。学長の推薦による受験の道も開かれています。2020年度は5名、2019年度は4名が大学院に進学しています。

保健体育学科
生徒座談会

# 体育から見つけた私たちの未来

**東京女子体育短期大学の保健体育学科で学ぶ学生に集まってもらい座談会を実施。東女体大での生活や卒業後の進路について和気あいあいと語り合いました。**

*Let's talk about dreams!*

## 志望動機と東女体大の利点

**笠原：**もともと体育教師を目指していて、尊敬していた高校の部活の先生が東女体大出身で、大学のお話を聞いて決めました。体育大だから実技が多いところも魅力的でしたね。

**原：**私はスポーツが学べて、家から通える学校を探す中で、東女体大のオープンキャンパスに参加して、明るい雰囲気と先生との距離が近い感じがいいなと。条件面も自分の夢も叶えられそうと思って、ここを選びました。

**鈴木：**実際に入学してから、先生との距離の近さを実感しましたね。実技で苦戦している時は、先生が横に付いて教えてくれたり。

**原：**私も東女体大に入るまではバレーボールが苦手だったけど、先生や友達が親身にアドバイスしてくれて、一緒になって取り組んでくれたので、上手くなりました。学生もみんなフレンドリーでとにかく元気です。

**鈴木：**そうそう！スポーツが好きな人が集まってるから、授業もみんな本気！すごく盛り上がって熱く、色々な競技を学べる環境が気に入っています。

**笠原：**コロナ禍での入学だったので、最初はオンライン授業だったり、分散登校でなかなか友達とコミュニケーションが取りづらい状況でした。通常授業が再開されて、やっぱり仲間と一緒にする実技授業が一番楽しい！

## 学んだことを未来に活かす

**鈴木：**女性専用のフィットネスクラブに就職します。祖母がフィットネスクラブに通っていることを知り、お年寄りの方に体を動かすことを伝えながら元気にする仕事がしたいと思ったことがきっかけです。体育大での経験を活かして、一人でも多くの方を元気にしたい。

**笠原：**インストラクターとして子供たちにスイミングの指導を中心に行う予定です。東女体大ではスポーツ医学や生理学など体の仕組みを勉強したり、教員を目指していたので生徒との関わり方なども学んできたので、就職してから活かせそう。

**原：**体力トレーニング実習など、スポーツ関係のお仕事をする上で必要になる実践的なことが学べるのも東女体大の魅力です。

**鈴木：**座学で体を動かすことを学び、実技でこれまでよりレベルの高い運動を習得することで、ただスポーツが好きというだけでなく、より深くスポーツを理解できます。東女体大で学んだことを活かしながら、利用者さんが抱える悩みに気付き、サポートできたらいいなと思います。

**笠原：**自分の体で感じ、学んできたこと、そして自分の明るさを武器に信頼されるインストラクターになりたいです。

### TALK MEMBER

（左から）

**鈴木 結衣**
保健体育学科2年
（東京都立福生高等学校出身）
女性専用のフィットネスクラブへ就職。お年寄りの方を中心に健康な体づくりを指導していく。

**原 蘭怜**
保健体育学科2年
（東京都立野津田高等学校出身）
卒業後は、関東圏のフィットネスクラブでインストラクターとして就職が決まっている。

**笠原 玲菜**
保健体育学科2年
（埼玉県立坂戸西高等学校出身）
埼玉県にあるフィットネスクラブへ就職。大学で学んだことを活かして、インストラクターチーフを目指す。